

牧水記念館で 企画展始まる

文学祭一環で
まず短歌展

沼津牧水会と市教委は、市制八十周年記念の沼津文学祭の一環として、企画展「沼津ゆかりの短歌・俳句展」を開催。十月二十六日までを前期として短歌展、同月二十八日から十二月七日までの後期は俳句展が、いずれも千本郷林の若山牧水記念館ラウンジで開かれるが、牧水の命日にもあたる十七日、まず短歌展がスタート。オープニングセレモニーが行われた。

牧水没後七十五年の年にも当たり、文学祭は「牧水、あらたな旅立ち」をテーマに、牧水をメインに取り上げている。牧水会の林茂樹理事長は、「(記念館で)俳句をテーマにしたのは初めての試み」と話し、「沼津を愛する人、文化を愛する人達に可愛がってもらえる企画展になれば」とあいさつ。

また、牧水の孫にあたる榎本篁子館長は、企画展を通じて沼津の文化の在り方を若い人にも再認識してほしい、と期待を述べ、牧水が亡くなる三日前に詠んだという俳句「つれづれや天上をはふ百足の子」と「秋の夜やのそのそと人の入りて来つ」を紹介した。

会場には、沼津に縁の深い人達や、つながりのある一般の人達から募集した色紙、短冊を中心に、戦後から今日まで出版された歌集などを展示。俳句を愛する人達それぞれの世界が表現された、個性豊かでバラエティーに富んだ、およそ百点が並ぶ。

また、元沼津市長の故長倉宜一氏から寄贈を受けた、牧水と妻の喜志子さんの直筆の色紙、短冊を二曲の屏風に仕立てた貴重な資料も公開している。牧水会幹事の曾根耕一さ



テープカットが行われ企画展がスタートした
＝千本郷林の牧水記念館で

る。作品を鑑賞していた女性には、「趣向を凝らした作品で楽しめ、市内にゆかりの方々ばかりが並び、親近感が湧くと同時に見応えがある。自分の作品を大切にしている様子がかがえる」と話している。開館時間は、午前九時

香陵台の牧水 歌碑を移転

香陵LCの援助受け
眺望優れた場所に

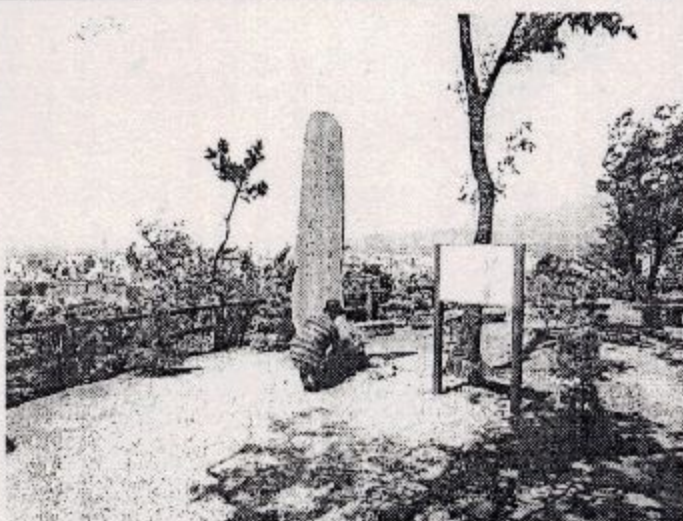
市教委は、若山牧水歌碑の移転記念式典を十七日、香貫山香陵台で行い、移転に協力した香陵ライオンズクラブ(大嶽正泰会長)と東京電力、N T Tの関係者らが出席した。これまで香陵台の広場休憩所南側にあった歌碑を北側の眺望の良い場所に移したもので、同ライオンズが市制八十周年記念の文学祭に協賛するという位置付けで資金援助。碑の移転は八月下旬に行われ、今月初旬に牧水

と歌碑を説明する看板を設置。

また、新設置場所では歌碑の背景を遮る電線と電話線、及び支柱の移設が東電とN T Tの協力で行われ、広場の西端にあった電柱は下側斜面へ。電線と電話線の二本ずつが同社によって移動されると、景色を遮るものがなくなり広場からの眺望は一変。

移転した歌碑は「香貫山いだきに来て吾子とあそび 久しくをれば富士はれにけり」を刻んだもので、沼津商工会議所観光部会が牧水三十三回忌の昭和三十五年九月十七日に建立した。

以来四十三年が経過する中で周辺の樹木が生長したり、休憩所建物が出来るなどして「歌碑が陰になって見えない」「建物で富士山が見えない」などの声があり、関係方面から移転の要望が市教委に寄せられていた。



眺望素晴らしい場所に移転した歌碑と、献花する
榎本篁子・牧水記念館館長＝香貫山香陵台で

氏は案内した市職員に、「歌碑は立派だが、いい場所にはない。良い場所に移すように」と話していたという。

しかし、経費が掛かることから教委が二の足を踏んでいた時に「新年度の事業で協力出来ることはないか」と同ライオンズクラブから申し入れがあり、移転が実現する運びになった。

沼津牧水会の林茂樹理事長は、「以前からの念願がかない感慨無量。駿河湾と狩野川、富士山、大瀬崎まで一望出来る、このような景色は全国でも珍しいのではないかと」喜びを語った。